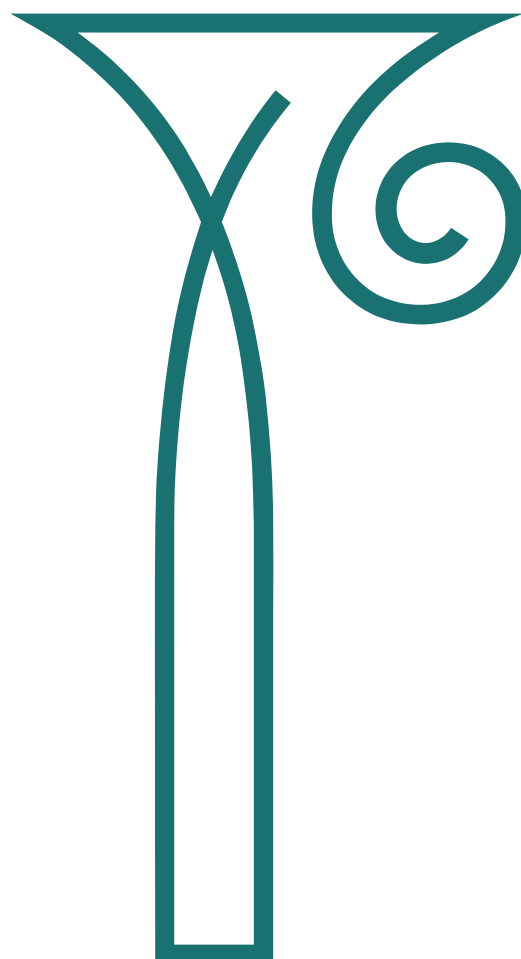


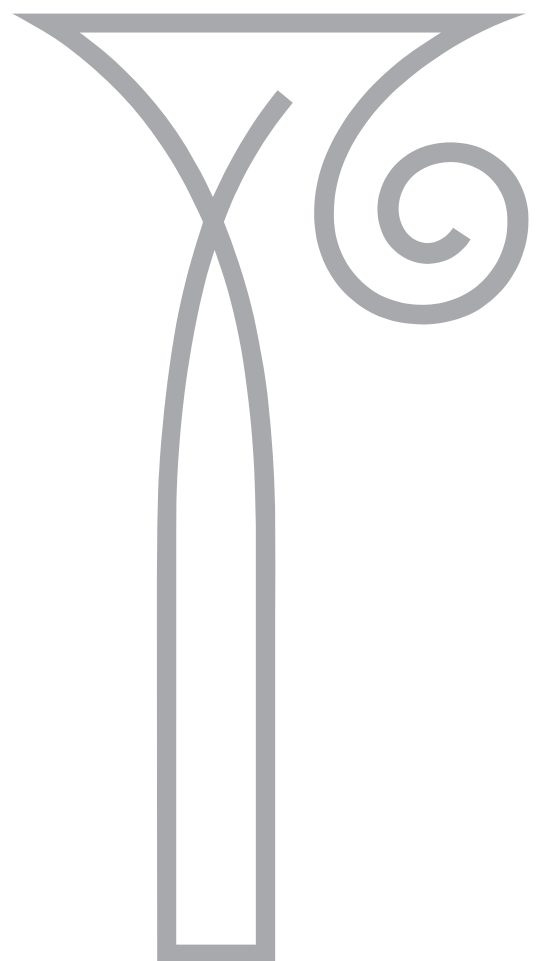
東京都庭園美術館 紀要

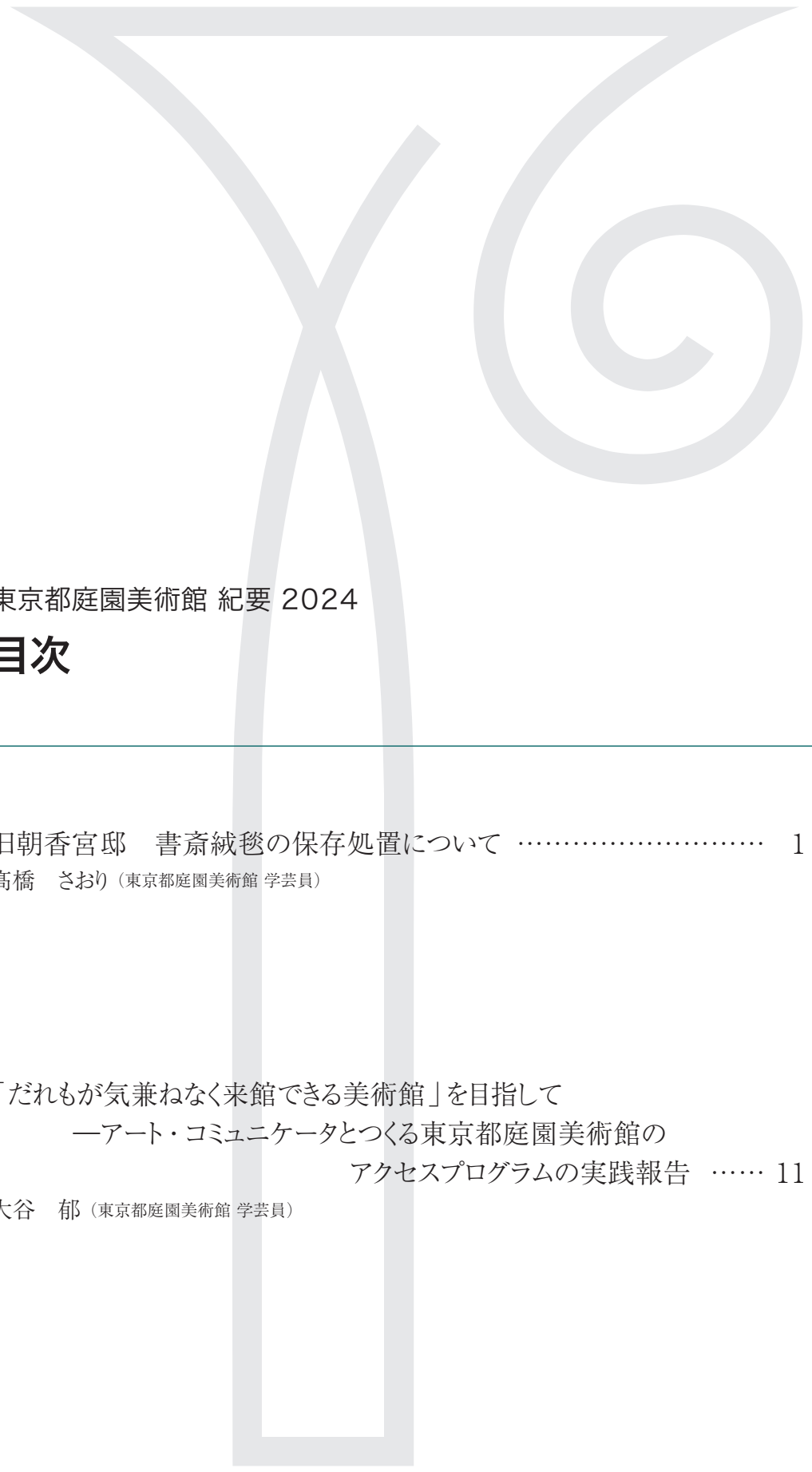
Tokyo Metropolitan Teien Art Museum
The Bulletin

2024



東京都庭園美術館 紀要 2024





東京都庭園美術館 紀要 2024

目次

旧朝香宮邸 書斎絨毯の保存処置について 1

高橋 さおり（東京都庭園美術館 学芸員）

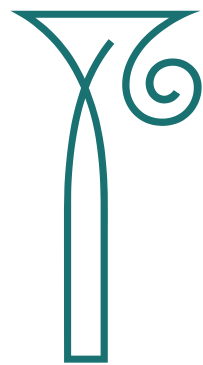
「だれもが気兼ねなく来館できる美術館」を目指して
—アート・コミュニケータとつくる東京都庭園美術館の
アクセスプログラムの実践報告 11

大谷 郁（東京都庭園美術館 学芸員）



旧朝香宮邸 書斎絨毯の保存処置について

高橋 さおり
(東京都庭園美術館 学芸員)
Saori TAKAHASHI
Curator
Tokyo Metropolitan Teien Art Museum



- 1. はじめに 3
- 2. 基本情報 4
- 3. 保存処置 5
 - 3-1. 表面クリーニング 5
 - 3-2. 低酸素処理 6
 - 3-3. 測色 7
- 4. まとめ 9

1. はじめに

1983年から東京都庭園美術館として活用している旧朝香宮邸には、宮邸時代に使用されていた家具類が多数現存しており¹、本稿で取り上げる書斎用に製作された絨毯も現存する家具に類するものの一つである。この絨毯は朝香宮邸が竣工した1933年頃の書斎を写した写真に机や椅子、電話台と共に写っている（写真2）。絨毯には、旧朝香宮邸の主要7部屋の内装設計を行ったフランス人アーティストのアンリ・ラパン²のイニシャル「HR」を用いたモノグラムが織り込まれており、2015年に重要文化財として指定された旧朝

香宮邸の歴史を構成する重要な要素の一つとされている。竣工90年を迎えた2023年に、この絨毯が今後も多くの皆様に見ていただけるよう、染織品保存修復士によるクリーニングおよび低酸素処理を行った。本稿ではそれら一連の作業を記録する。

なお、作業については、表面クリーニングは染織品保存修復士の山崎真紀子氏、低酸素処理は染織品保存修復士・佐賀大学芸術地域デザイン学部准教授の石井美恵氏、測色は筆者がそれぞれ実施した。本稿「2. 基本情報」および、「3-1. 表面クリーニング」は、山崎真紀子氏の報告書³を基に再編集している。



写真1 書斎（現在の様子）

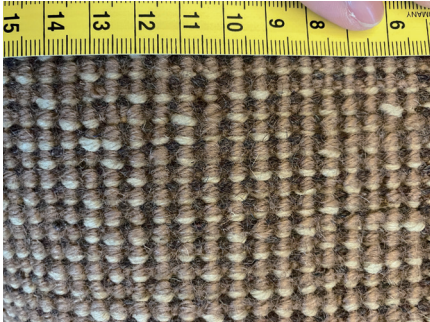


写真2 「朝香宮邸竣工写真等」1933年 松井写真館（東京都庭園美術館蔵）

2. 基本情報

書斎絨毯は机、椅子、電話台とともに揃い物としてアンリ・ラパンによりデザインされ、1933年に同じくラパンが手

がけた大食堂の装飾壁画一式と共にフランスから輸入されたものと考えられる。毛足が長く密に織られており、虫損が多少見られ変退色もあるが、状態は比較的良好である。

1 寸法 (cm)	縦横ともに278cm (最大値)
2 形状・仕立て	八角形の絨毯。織耳はそのままだが、それ以外の端は裏に折り返して縫い付けてある。房はなし。
3 模様	幾何学模様。(八角形や星形八角形が重なり、その外側を波と水玉が囲む。中心部の机に隠れているところは円形。)
4 色	パイル糸：黒、紫、赤紫、薄紫、ピンク、クリーム色など 経糸と緯糸：クリーム色
5 素材	パイル糸：毛 *顕微鏡観察で確認し同定した 経糸及び緯糸：木綿
6 織密度	ノット数：41,800ノット/㎡ *経糸38本(19組)/10cm、緯糸22本/10cm   写真3 経糸方向の織密度 経糸38本(19組)/10cm 写真4 緯糸方向の織密度 緯糸22本/10cm
7 糸の撚り	経糸・緯糸共にS撚りの双糸
8 技法	手織り。詳細は今後の調査研究による。
9 その他	1 アンリ・ラパンのモノグラムが織り込まれている。  写真5 織り込まれたアンリ・ラパン モノグラム 2 裏面にラベルあり。縫い付けてある布にインクで手書き。 No5624/20×20/2.85×2.85  写真6 裏面に縫い付けられたラベル

3. 保存処置

石井美恵氏によると作品に関する保存計画を立てる際には、作品情報の収集、状態の診断、現在の役割や活用法の調査、過去と現在の関連研究に関する調査、そして保存倫理への配慮が必要であると述べている⁴。書斎絨毯は製作後約90年経過しているが、著しい劣化は確認されていないことから、2023年度は寸法などの基本情報整理、ミュージアムクリーナーを用いた表面クリーニング、虫菌害防止のための低酸素処理、また低酸素処理による変色退色がないかをチェックし、さらに現状の記録のため色彩色差計による測色を2回行った。スケジュールについては以下のとおりである。

2023年6月	表面クリーニング（1回目）
2023年12月	色彩色差計による測色（1回目）
2023年12月末 ～2024年1月末	低酸素処理
2024年1月末 ～2月上旬	表面クリーニング（2回目）・ 裏面クリーニング
2024年2月	色彩色差計による測色（2回目）

3-1. 表面クリーニング

染織品に付着している汚れは、美観を損ねると共に材質の劣化を促進し、時には取扱者の健康を損ねる恐れもある。今回は美観及び劣化促進防止を観点に、堆積した埃を取除くため表面クリーニングを2回実施した。クリーニングには、HEPA フィルター付きミュージアムクリーナーを用い、繊維表面上の埃をできるだけ吸引した。クリーニング時には絨毯の毛が抜けないように低い吸引力で行い、また抜けた毛などを吸引しないようにクリーナーのノズルにはネットを被せ処置を行った（写真7）。クリーニング後にはクリーナーに付属している紙パックの中身を回収し、細かい土砂などの塵埃を主に吸い取ったことを確認している。

2023年6月は表面のみのクリーニングを行ったが、低酸素処理後の2024年1月末から2月上旬には、2023年6月に行えなかった表面のパイルの毛の間や裏面などを行った。パイルの毛の間を開き絨毯の内側を丁寧にクリーニングすることで、表面上は見えない虫の抜け殻や鞘⁵がないかを確認している（写真8）。裏面は、通常は絨毯の上に机があり今まで実施できなかったが、今回は低酸

素処理のため机を移動し実施することができた（写真9）。殺虫を目的とする低酸素処理後のクリーニングの際には、パイル毛の間からイガの鞘や（写真10）、絨毯端の裏面の一部に虫損跡を確認している（写真11）。書斎絨毯の状態は非常に良いが、虫害の危険性や土砂などの塵埃の堆積があり、状態の確認、虫の死骸、埃などによるカビの予防のため、年に1回程度定期的に専門家による表面クリーニングを実施することが望ましい。

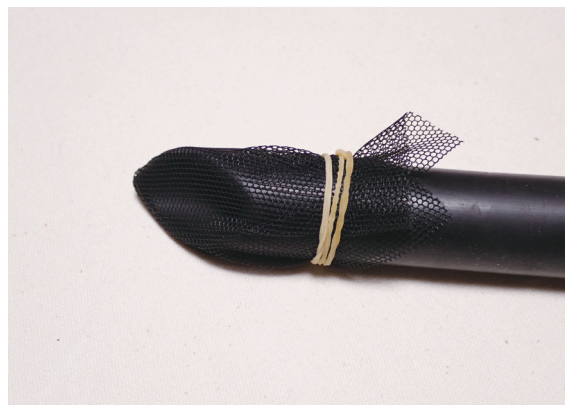


写真7 ミュージアムクリーナーのノズルにネットを付けて清掃した



写真8 絨毯の内側に筒を差し入れパイルを開きながらクリーニングしている様子



写真9 裏面のクリーニングの様子



写真10 イガの鞘と思われるもの（表面のパイルの中）



写真11 端近くの虫損（裏面）

3-2. 低酸素処理

染織品を含め、文化財にとって虫害やカビによる汚損はできる限り避ける必要がある。虫菌害の予防として、酸素濃度を下げ維持することで殺虫する方法で、昆虫の卵・幼虫・さなぎ・成虫、全てのステージで有効であるとされている低酸素処理を実施した⁶。処理にあたり高気密なバリア袋であるガスバリア袋（エスカルフィルム）をヒートシーラーを使用して作成し、三菱ガス化学株式会社のRP剤（有機系資料用のRP-K）を封入し、低酸素状態を作り4週間処理した（写真12）。なお、低酸素状態が作り出されているかはRP剤と共に袋内に封入した酸素インジケーターの色の変化で低酸素状態が保たれたことを確認した（写真13）。



写真12 絨毯を4つ折りにしガスバリア袋に入れた様子



写真13 RP剤と酸素インジケーター

3－3. 測色

色の数値化は様々あるが、現在あらゆる分野で最も使用されているCIEL*a*b*色空間を用い書斎絨毯の低酸素処置前後の色の変化をモニタリングするため、色彩色差計(コニカミノルタジャパン株式会社 CR400)を用いて表面色を記録した(写真14)。L*a*b*色空間では、明度をL*、色相と彩度を示す色度をa*、b*で表現する。低酸素処理前の2023年12月と処理後である2024年2月に測定した数値を、色相と彩度を表すa*とb*を色空間色度図にプロットした(表1, 図1, 2)。なお、プロットした数値はそれぞれ同じ個所で3回測定した平均値である。測定の結果、低酸素処理による変退色は起きず、むしろ2回

目の表面クリーニングにより表面の塵埃が取り除かれたためか、色空間色度図上で各色同じ様な位置を示していた数値が、処置後には数値の位置がばらけると共に視覚的にも鮮やかになった。

書斎絨毯は7色で模様が表現されているが、いずれも色空間色度図ではくすんだ色を表す中心付近に位置していた。日頃我々が見ることができる個所は約90年間の間に少しづつ退色してしまったようだが、机によって隠れていた中心の円形部分の紺色は繊維の状態も大変良く鮮やかな色彩を放っており、織り上げられた当初は全体的に現在より鮮やかな絨毯だったのではないかと考えられる。

【表1 書斎絨毯の測色結果】 使用機器：色彩色差計(コニカミノルタジャパン株式会社 CR400)

	低酸素処理前 (2023年12月19日測色)			低酸素処理後 (2024年2月1日測色)		
	L*	a*	b*	L*	a*	b*
ベージュ①	43.64	10.42	9.27	42.29	5.85	14.84
ベージュ②	52.07	8.29	10.41	49.91	3.42	17.36
ベージュ③	51.21	9.55	9.77	48.84	4.69	16.13
ムラサキ①	37.9	14.85	3.46	36.91	11.11	9.26
ムラサキ②	24.79	16.02	5.03	22.01	12.77	8.75
ムラサキ③	25.04	12.32	-11.66	21.99	8.27	-6.24
ウスムラサキ①	47.52	7.56	0.93	44.93	2.68	7.60
ウスムラサキ②	46.43	8.77	4.23	45.02	4.26	10.73
紺色	10.71	3.41	-4.17	8.85	1.33	-1.10
茶色	44.33	9.77	17.39	41.85	5.83	22.52
黄色	56.01	5.08	20.38	54.02	-0.29	26.35
水玉①	54.64	4.09	12.63	51.29	-0.88	19.03
水玉②	50.01	9.42	9.96	47.98	4.76	16.15

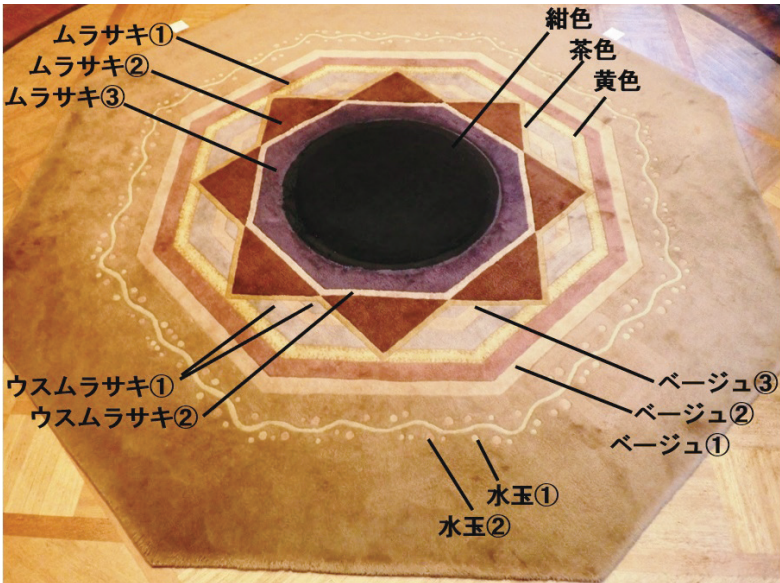


写真14 測色場所

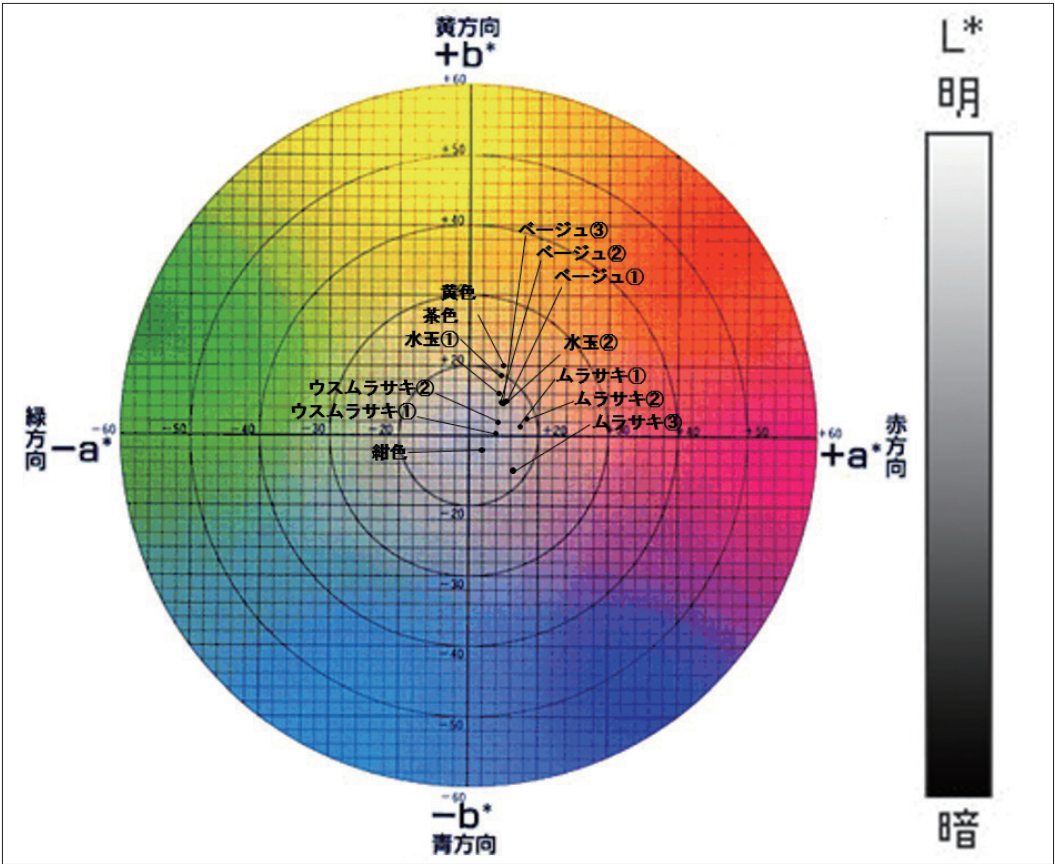


図1 低酸素処理前の書斎絨毯の色 プロット図

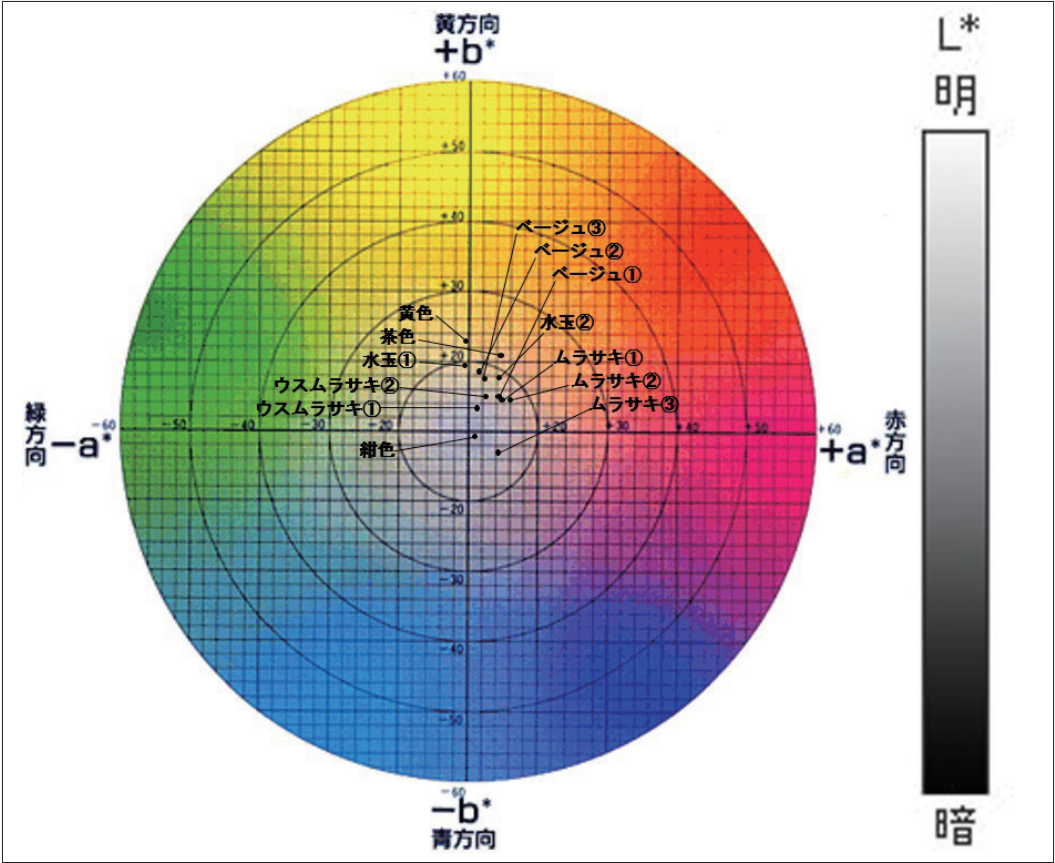


図2 低酸素処理後の書斎絨毯の色 プロット図

4. まとめ

以上、本稿において2023年度に実施した書斎絨毯の保存処置について一連の作業をまとめた。今回実施した虫菌害対策としての低酸素処置とクリーニングの保存処置は、建物を公開しながら保存している当館において重要な作業である。製作場所や絨毯に使用された染料や織についての分析など研究の余地はまだまだあるが、保存処置をするにあたり、処置前後の色をモニタリングする目的で絨毯の色を測色したことで、絨毯の客観的な色と退色の度合いを知ることができた。また絨毯の観察から手織り絨毯であること、毛と木綿が使われていることなど、材料や製作法の情報も得られた。色の退色などは視覚

的に感じるものの、約90年前に朝香宮邸のために製作され建物と同じ時の流れを経ていることから、絨毯は室内空間に馴染み、書斎の空間全体が竣工当時を偲ばせる旧朝香宮邸の見どころの一つとなっている。しかしながら、劣化要因全てを防ぐのは難しく、今後も現在のようにオリジナルであるこの絨毯をそのまま公開し続けるか否かは当館にとっての課題の一つである。絨毯に関する詳細な分析・研究を行った後に復原するなどし、ゆくゆくはオリジナルは建物公開展など限定で公開し、それ以外の展覧会では復原品を来館者に公開していくことも検討する必要がある。



写真15 2024年1月末～2月上旬に実施したクリーニング完了後の写真

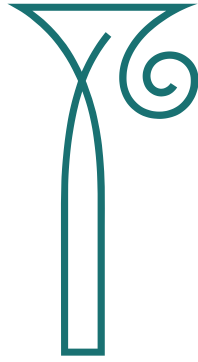
【註】

- 1 小泉和子「旧朝香宮邸家具調査報告」『家具道具室内史』第6号、2014年に基づく。
- 2 アンリ・ラパン Henri Rapin (1873-1939)
画家、室内装飾家、デザイナー。フランス・パリ生まれ。国立美術学校で新古典主義の画家ジャン＝レオン・ジェロームに師事し、1898年よりフランス芸術家協会のサロンに絵画を出品していた。1900年頃には家具や装飾品を出品しはじめ、次第に装飾芸術の世界でその才能を発揮するようになる。建築、室内装飾、家具、壁画、ステンドグラス、陶磁器など幅広い分野で、贅沢な素材と細やかな技巧、豊かな色彩を特徴とするラパンのスタイルが注目された。1920-34年にかけて国立セーヴル製陶所の芸術顧問、および装飾美術家協会の副会長に就任。1925年の現代装飾美術・産業美術国際博覧会（通称アール・デコ博覧会）では、「フランス大使館」や「国立セーヴル製陶所」など、数々のパヴィリオンの企画やデザインを担当した。朝香宮邸では、大広間、大客室、小客室、次室、大食堂、殿下書斎および殿下居間の計7室の内装デザインを手がけている。仕事仲間であった同時代の作家たちの作品を効果的に取り入れながら、自らも壁画を描き、「香水塔」や家具をデザインするなど、調和のとれたアール・デコの空間を創り上げた。
- 3 山崎真紀子「修復処置報告書 殿下書斎絨毯クリーニング」2023年6月／2024年1月・2月
- 4 石井美恵「博物館における染織文化財の保存」佐賀大学芸術地域デザイン学部、2023年
- 5 幼虫が自分の周りに作る巣のようなもの。
- 6 村林茂「文化財保護への酸素濃度抑制技術の応用」文化財虫菌害研究所発行「文化財の虫菌害」No.59、2010年

今回の保存処置、また本稿執筆において多大なご協力をいただいた関係各位にこの場を借りて心より御礼申し上げます。

「だれもが気兼ねなく来館できる美術館」を目指して
—アート・コミュニケーターとつくる東京都庭園美術館の
アクセスプログラムの実践報告

大谷 郁
(東京都庭園美術館 学芸員)
Iku OTANI
Educator
Tokyo Metropolitan Teien Art Museum



はじめに	13
1. アクセスプログラムの実施に至る背景	13
1-1. 東京都庭園美術館の建物の特性とバリアフリーの状況	13
1-2. アクセスプログラムの計画	14
2. アート・コミュニケーターとの協働	14
2-1. アート・コミュニケーターとは	14
2-2. アート・コミュニケーターと協働する意義	15
2-3. 連携方法と具体的なプログラムの計画	15
3. 休館日のプログラム	15
3-1. 障害のある方対象 アート・コミュニケーターとめぐる庭園美術館	16
3-2. ベビーといっしょにミュージアムツアー	17
3-3. ベビーデー 赤ちゃんと暮らす家族のための特別開館日	19
3-4. 休館日のツアーおよびベビーデーの経験から	20
4. 「フラットデー」への展開	20
4-1. プログラムの条件・実施方法の検討	20
4-2. 開催の概要と記録	21
4-3. 運営の成果と課題	23
おわりに	24

はじめに

「だれもが気兼ねなく来館できる美術館」とは、どのような美術館だろうか。2022年にICOM（国際博物館会議）が策定した博物館の新しい定義には、「誰もが利用でき、包摂的であって、多様性と持続可能性を育む¹」という人々の文化芸術へのアクセスの権利に関する文言が明示された。何かしらの障壁によりミュージアムを訪れることが出来ない人や、行き先の選択肢にすら無い人も含め、多様な人々を利用者として想定したミュージアム運営のあり方がより活発に議論されている。このような世界的な潮流の中、近年では日本においても多くの美術館がアクセシビリティの課題を掲げ、多様な利用者のアクセスを保障するための取り組みを行っている。例えば、建物・空間内の物理的なバリアフリー化や様々な対象に向けたプログラムの実施、またそれらを実装するために必要な外部の専門家との連携など、施設ごとの特性や状況に合わせた展開を見ることができる。

筆者が所属する東京都庭園美術館においては、運営方針の柱の一つに「あらゆる鑑賞者に開かれた美術館の実現²」を掲げ、建物の整備やプログラムの実施などに取り組んでいる。一方で歴史的な建造物を美術館として活用する当館は、建物の保存も重要な使命としており、バリアフリー化のために建物自体に手を加えるには慎重な判断を要する。このような当館特有の制約を踏まえ、2020（令和2）年度より建物への物理的な対処とは異なる方法で来館のしづらさを解消しようという試みをスタートさせた。障害のある人や乳幼児とその家族を対象としたアクセスプログラムである。本プログラムの計画・実施においては、当館が所属する公益財団法人東京都歴史文化財団のアーツカウンシル東京とも協議を重ね、同機関と東京都が都立文化施設のアクセシビリティ向上を目指して主催するクリエイティブ・ウェルビーイング・トーキョー事業³とも連携してきた。

本稿は、本年度で5年目の節目を迎える当館のアクセスプログラムについて、その経緯や実践を振り返ることで成果や課題を抽出し、今後の取り組みの検討に繋げることが目的とする。まず第1章では、アクセスプログラムの実施に至る背景として、歴史的建造物を特徴とする当館のバリアフリーの状況をまとめ、それに対応して2020（令和2）年度に立案した本プログラムの計画について述べる。第2

章では、初年度より協働したアート・コミュニケータとの連携とその意義をまとめ、第3章で約2年半にわたり実施したアート・コミュニケータによる鑑賞ツアーについて振り返る。最後に、鑑賞ツアーの実践を経て2023（令和5）年度に新たにスタートした「フラットデー」の事例報告と課題について考察し、「だれもが気兼ねなく来館できる美術館」を目指す当館のアクセスプログラムの課題と展望を明らかにする。

1. アクセスプログラムの実施に至る背景

1-1. 東京都庭園美術館の建物の特性とバリアフリーの状況

アクセスプログラムが始まった背景には当館の建物の特性とそれに伴うバリアフリーの取り組みがある。当館の本館は1933（昭和8）年に朝香宮邸として竣工した。戦後、邸宅の役割を終えた建物は外相・首相公邸や国の迎賓館に使用された歴史を経て、1983（昭和58）年に東京都庭園美術館として開館する。それに伴い、展覧会事業を安定的に行うための空調設備やセキュリティの強化など様々な整備が進められた⁴。建物自体を文化財として保存管理する当館は老朽化への対応はもちろん、美術館となる以前に改変された部分を本来の姿に近づけるための修復も行っている⁵。

バリアフリーの観点に立つと、2017（平成29）年にエレベーターが初めて設置されたことは重要な契機である（図1）⁶。これにより、車椅子をはじめ階段の使用が難しい人も安全に2階に移動することが可能となり、ほとんどの展



図1 本館エレベーター

示室をまわるできるようになった。また建物以外のエリアでは、2018（平成30）年に庭園内にバリアフリー園路が設けられ、車椅子を利用する人も敷地全体を周遊しやすい整備が行われた。

しかし、建物・敷地の大部分が重要文化財に指定されている当館では、文化財の保存という観点からバリアフリー化が実施されていない場所も存在する。例えば、本館3階への移動手段は階段のみとなっており、階段を利用できない来館者には2階で展示内容の写真を見せるなどの対応を行っている。また、玄関や2階の一部には大きな段差があるため、スロープ板をその都度設置することで対応している（図2）。さらに、各部屋の出入り口には数センチ程度の段差（^{くつずり}沓摺）があるため、必要に応じて専用のスロープなどをはめ込むことで調整している。多様な来館者のニーズに応じた整備が、建物の本来の姿を保存するという使命との共存の中で進められている。加えて、段差のある場所やスロープの設置場所を示したユニバーサルガイドブックを当館のウェブサイトに掲出し⁷、「空間や通路の狭さが気になる」「建物が貴重なので気を遣う」といった心理的なハードルを感じる人が来館前に館内の環境を把握できるよう努めている。

1-2. アクセスポログラムの計画

都立文化施設の運営を行う公益財団法人東京都歴史文化財団は、東京都の指定管理者として2021（令和3）年度～2026（令和8）年度の東京都庭園美術館の活動指針や計画を事業計画書にまとめている。教育普及活動の項目においては子供や親子、高齢者、障害のある人、外国人など、あらゆる人々が参加できるプログラムを展開



図2 本館2階の仮設スロープ

することが明示されている⁸。また、これらの計画は「『未来の東京』戦略ビジョン」をはじめとする東京都の施策とも連動しており、アクセシビリティに関する取り組みは「クリエイティブ・ウェル・プロジェクト（現クリエイティブ・ウェルビーイング・トキヨー事業）」として重点的に取り組む方針が示されている⁹。本計画の実行に向けて、当館では2020（令和2）年度より「障害のある人」と「乳幼児と家族」を対象としたアクセスプログラムの具体的な検討を始めた。

障害がある人の中には車椅子や杖を使う人もいるため、館内の段差や間口の狭さが来館の障壁となっていた。また、展示室は混雑することもあり、混み合う場所に不安を感じる人のニーズにも対応したいと考えた。そして乳幼児を連れた家族にとっての来館のハードルの一つに、建物の保全の観点から本館内でベビーカーを使用できないという制約があった。入館時にベビーカーを預けて鑑賞することは保護者にとって負担が大きい場合がある。庭園にはベビーカーを利用する親子も多く訪れているため、建物内での展覧会鑑賞にも繋げたいと考えた。また、子供が泣いたり大きな声を出してしまうことが心配で、美術館に行きづらいつと感じている保護者は多く、来館までの心理的なハードルにも対応する必要があった。

2. アート・コミュニケーターとの協働

アクセスポログラムの実施には、文化施設をはじめ様々な場で対話を重視した活動を行うアート・コミュニケーターとの協働が有効であると考えた。このことは前述の事業計画書にも明示されている¹⁰。協働にあたっては、特定非営利活動法人アート・コミュニケーション推進機構（略称、PARC）を通じ、アート・コミュニケーターの有志から成る任意団体「アート・コミュニケーター東京¹¹」で活動するメンバーと連携を図ることとした。

2-1. アート・コミュニケーターとは

当館が協働するのは、東京都美術館と東京藝術大学の連携事業「とびらプロジェクト」でアート・コミュニケーター（愛称：とびラー）として活動し、3年間の任期を終えた人々である。18歳以上の市民から成り、2012（平成24）年にプロジェクトが始まって以降、毎年40名程度が新たに募集され、多様なバックグラウンドを持つ人々が美

美術館を拠点に活動している¹²。とびラーは多様な利用者と美術館を繋ぎ、美術館の文化資源を介して対話を重視した活動を展開している。任期中には、作品の鑑賞をはじめとする美術館の活動に関わる様々なテーマの講座やプログラムに参加するほか、自発的に活動をつくり、発信する機会を持つこともでき、美術館の学芸員や大学の教員、そしてとびラーの仲間とともに実践を重ねている¹³。

とびラーとして3年間の任期を満了したアート・コミュニケータの多くは、とびらプロジェクトでの経験やネットワークを活かし、それぞれのコミュニティや関心の中で継続的に活動している。地域の文化資源を活用した鑑賞プログラムの実施や、音楽ホールの建築ツアーなど、その活動は多岐にわたっている¹⁴。

2-2. アート・コミュニケータと協働する意義

とびらプロジェクトの任期満了後に「アート・コミュニケータ東京」で活動するメンバーの多くは、美術館での活動にも参画し、ミュージアムについての理解を持ちながら豊かな鑑賞体験を作る実践を重ねている。アクセシビリティの課題に対応した美術館プログラムとの連携もその一つであり、東京都美術館の「障害のある方のための特別鑑賞会¹⁵」や当館のアクセスプログラムでも活動している。

このような活動の基盤には、とびらプロジェクトでの学びと実践がある。とびラーは美術館のアクセシビリティについての理解を深めるとともに、実際のプログラムでは、安心して鑑賞できる場をつくるために、参加者それぞれに関心を寄せながら、よく「きく」ことを意識したコミュニケーションを大切にしている¹⁶。当館のアクセスプログラムを実施するにあたり、このようなアート・コミュニケータの経験が重要な役割を果たすと考えた。

2-3. 連携方法と具体的なプログラムの計画

アート・コミュニケータと連携するにあたり、当館では特定非営利活動法人アート・コミュニケーション推進機構（PARC）への委託を通じ、プログラムの計画段階から協働を始めた。本NPO法人は、「アート・コミュニケータ東京」の一部のメンバーにより構成されている。アート・コミュニケータが様々な場所で活動する際の契約や活動保険の手続きなどを担っている¹⁷。

2020（令和2）年7月、「障害のある人」と「乳幼児と家族」を対象としたプログラムの実現に向けPARCとの打ち合わせを開始し、まずは展示室内の環境を検証することから始めた。本事業を担当した筆者は、当初、東京都美術館の「障害のある方のための特別鑑賞会」を参考に、休館日に数十組の参加者を迎えた特別観覧日を設けることを構想した。しかし協議をする中で、狭い場所や段差が多い当館では、車椅子に乗る人や杖を使う人などが大勢来館した場合に、安全を担保できないことが懸念事項としてあがった。そこで、当館では休館日に少人数を対象としたマンツーマン形式の鑑賞ツアーを行うこととした。個別の参加者への丁寧な対応やコミュニケーションを重視した少人数制のプログラムが、より当館に適していると考えたからである。

3. 休館日のプログラム

2020（令和2）年12月には当館で初めてのアクセスプログラム「障害のある方対象 アート・コミュニケータとめぐる庭園美術館¹⁸」が開催され、2021（令和3）年3月からは「ベビーといっしょにミュージアムツアー」がスタートした¹⁹。いずれのツアーも休館日を利用し、展覧会ごとに1回ずつ実施することを計画した。

両ツアーは参加者1組単位で行い、参加者1組につき1名のアート・コミュニケータがファシリテーターとして伴走した。本ツアーは作品の解説ではなく、両者が一緒に作品を楽しむことを目的としており、アート・コミュニケータは参加者それぞれの状況に合わせてペースや内容を調整した。会場内で狭い間口や段差を通過する際、アート・コミュニケータは参加者の安全にも配慮するが、介助を行うわけではない。

参加者が安心して鑑賞できる場を作るために、PARCと協働して様々な準備を行った。プログラムごとに、当日活動するアート・コミュニケータのミーティングを事前に設定し、ツアーの概要や留意事項の確認に加え、学芸員が作品の見どころを紹介するなど、展覧会に関する情報提供も行う。メンバーは当日までに各自で会場を下見する。展示の内容や動線を把握することでツアーの流れを具体的にイメージし、参加者の特性や状況に応じた柔軟な対応ができるよう備えた。

アート・コミュニケータは当日初めて対面する参加者に合

わせて時間の過ごし方を決めている。個別のニーズに柔軟に対応することで、参加者がじっくりと展覧会を鑑賞できる環境づくりに努めている。また、ツアー中はファシリテーター一人では対応しきれないこともあるため、プログラム全体を見守るアート・コミュニケータが会場を回遊しながら必要な場面で適宜サポートに加わるなど、メンバー同士が協力しながら実施した。

下記にそれぞれのプログラムの実施概要と記録をまとめる。

3-1. 障害のある方対象 アート・コミュニケータとめぐる庭園美術館

障害のある方が対象のツアーは、午前と午後の2部制とし、各回最長90分間とした。参加者の体調やニーズに

より途中で終了することもできるようにしている。また、展示室以外でも通常の開館日同様の体験ができるように、ミュージアムショップとカフェも時間限定で営業した。参加にあたり特別な配慮や手話通訳が必要な場合は申し込み時に記載してもらい、アート・コミュニケータとも情報を共有しながら必要な準備を行った。

◆開催概要（全回共通）
対象：身体障害者手帳・愛の手帳・療育手帳・精神障害者保健福祉手帳・被爆者健康手帳などをお持ちの方とその介助者
時間：[午前の部]10：30～12：00
[午後の部]13：30～15：00
参加費：無料（障害者手帳等の提示により本人とその介助者2名まで観覧料無料）
申し込み方法：当館ウェブサイトのフォームから

◆開催記録

表1 「障害のある方対象 アート・コミュニケータとめぐる庭園美術館」開催記録

	実施日	展覧会	定員	参加人数
2020年度	2020年12月9日(水)	生命の庭―8人の現代作家が見つけた小宇宙	各回15名とその介助者(原則1名)	[午前]14組28人 [午後]15組26人
	2021年3月10日(水)	20世紀のポスター「図像と文字の風景」―ビジュアルコミュニケーションは可能か?		新型コロナウイルス感染症拡大防止のため中止
2021年度	2021年6月7日(月)	建物公開2021 艶めくアール・デコの色彩	各回10名とその介助者(原則1名)	[午前]2組4人 [午後]9組12人
	2021年8月23日(月)	ルネ・ラリック リミックス―時代のインスピレーションをもとめて		新型コロナウイルス感染症拡大防止のため中止
	2021年11月15日(月)	キューガーデン 英国王室が愛した花々 シャーロット王妃とボタニカルアート		[午前]9組14人 [午後]10組18人
	2022年2月28日(月)	奇想のモード 装うことへの狂気、またはシュルレアリスム		[午前]11組20人 [午後]8組10人
2022年度	2022年6月6日(月)	建物公開2022 アール・デコの貴重書	各回10名とその介助者(原則1名)	[午前]10組20人 [午後]9組14人
	2022年7月25日(月)	蜷川実花 瞬く光の庭		[午前]10組19人 [午後]8組16人
	2022年10月24日(月)	旅と想像/創造 いつかあなたの旅になる		[午前]8組11人 [午後]8組13人
	2023年2月27日(月)	交歓するモダン 機能と装飾のポリフォニー		[午前]8組11人 [午後]6組8人



図3 作品の前で会話をする参加者とその介助者、アート・コミュニケータ（2022年10月24日）



図4 タブレットを利用し、車椅子の視線から見づらい高さにある作品の写真を見せる様子（2021年11月15日）

初年度は定員を15組と設定したが、全組がほぼ同じタイミングでスタートする本ツアーは各所で滞留が起こりやすく、2年目からは人数を10組に減らした。新型コロナウイルス感染症の影響により中止を余儀なくされた回もあったが、2022年度までに合計8日間16回実施し、参加数はのべ145組244人であった（表1）。図3、4は当日のツアーの様子である。

◆参加者の感想・意見

ツアーの感想

- ・泣いたりしてしまう障害を持つ妹と美術館に来る機会は無かったが、今回はとても良い時間だった。
- ・精神障害があるため、人がたくさんいるところや騒がしい環境が苦手である。アートに触れることができ、貴重な時間となった。
- ・作品の印象をシェアすることができて楽しかった。また、建物の見どころも教えてもらい勉強になった。
- ・アート・コミュニケータの同行により不安なく鑑賞できて満足した。

ツアーの運営に関する意見

- ・薬の副作用で口が乾いて体が疲れてしまう瞬間があった。時間がもったいないが、水分補給できる時間があったらより有難かった。
- ・ろう者は手話通訳と作品を同時に見ることができないため、話す時間と作品を見る時間を分けてほしい。

展示や会場の環境に関する意見

- ・車椅子の高さでは見えにくい展示物があったため改善してほしい。
- ・聴覚に障害がある人もわかるように映像には字幕がほしい。



図5 作品の前で会話をしている参加者とアート・コミュニケータ（2021年10月18日）

・視覚障害者用に触れるものがあると良い。

参加者のコメントから、普段は美術館に行きづらいと感じている障害のある人やその家族・介助者が、本ツアーをきっかけに来館できたことが分かった。アート・コミュニケータとペアになって鑑賞するツアー形式は概ね好評であり、満足度も高かった。貸し切りの環境であるため周囲に気を遣わず過ごせることや、アート・コミュニケータの案内があることで安心できるといったコメントも多かった。

一方で「説明・解説してもらえたことが良かった」という主旨の感想も散見された。本ツアーは作品の解説ではなく、アート・コミュニケータと参加者が一緒に作品を楽しむことを目的としているが、説明をしてほしいという要望もあり、必要に応じて対応を行った。プログラムの趣旨が広報の時点で伝わり切らないという課題が明らかになった。こういった課題をはじめ、ツアーに関する要望や意見に対しては都度見直し、振り返りを行うなどして改善に努めた。また、展示に関する意見や要望は展覧会の担当者にも共有した。

3-2. ベビーといっしょにミュージアムツアー

乳幼児と家族を対象としたツアーの時間は最大60分間とした。終了時間は明記しているが、実際の運営では30分ほどの延長可能時間を設け、子供の事情による大幅な遅刻や途中離脱があった場合にも満足に鑑賞を楽しめるよう考慮している。そして、通常はベビーカーを利用できない本館内でも、ツアー中に限り利用できるようにした。毎回定員を上回る応募となり、多い時では当選倍率が約10倍にのぼった。



図6 談笑する参加者とアート・コミュニケータ（2021年3月24日）

◆開催概要（全回共通）

対象：ベビーカーに乗る年齢・月齢の赤ちゃんとその保護者（保護者は原則2名まで）

時間：11：00～12：00（13：00まで庭園も利用可能）

参加費：無料（※別途、要観覧料）

申し込み方法：当館ウェブサイトのフォームから

◆開催記録

表2 「ベビーといっしょにミュージアムツアー」開催記録

	実施日	展覧会	定員	参加人数
2020年度	2021年3月24日（水）	20世紀のポスター［図像と文字の風景］—ビジュアルコミュニケーションは可能か？	10組	9組23人
2021年度	2021年6月7日（月）※	建物公開2021 艶めくアール・デコの色彩		2組5人
	2021年8月10日（火）	ルネ・ラリック リミックス——時代のインスピレーションをもとめて		9組25人
	2021年10月18日（月）	キューガーデン 英国王室が愛した花々 シャーロット王妃とボタニカルアート		11組29人
	2022年3月22日（火）	奇想のモード 装うことへの狂気、またはシュルレアリスム		10組25人
	2022年5月23日（月）	建物公開2022 アール・デコの貴重書		11組28人
2022年度	2022年11月21日（月）	旅と想像／創造 いつかあなたの旅になる		11組29人
	2023年1月30日（月）	交歓するモダン 機能と装飾のポリフォニー		12組28人

※2021年6月7日（月）の回は当初5月31日（月）に実施を予定していたが、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため延期となり、「障害のある方対象 アート・コミュニケーターとめぐる庭園美術館」と合同で開催した。

合計8日間8回実施し、参加数はのべ75組192人であった（表2）。また、2022（令和4）年度の実施回数が障害のある方を対象としたツアーが4回であるのに対して3回としたのは、ツアーのニーズの高さを受け、次節（3-3）で紹介する「ベビーデー」を新たに実施したためである。ツアーの様子は図5、6の通り。

◆参加者の感想・意見

ツアーの感想

- ・子供連れだとゆっくり展示が見られず、周りに気を遣うが、今回は気兼ねなく観覧することができて良かった。子育ての気分転換にもなった。
- ・子供連れの方とコミュニケーションをとりながら過ごせて良かった。
- ・アート・コミュニケーターが一組ずつ付き添っていたことで、リラックスして周ることができた。
- ・作品だけでなく建物のことも教えてもらえて楽しかった。
- ・ベビーカーでまわれたことが良かった。子供がぐずって抱っこが必要な時には、アート・コミュニケーターがベビーカーを運んでくれて助かった。

ツアーの運営に関する意見

- ・乳幼児や未就学児と参加できるプログラムが増えるとうり

がたい。

- ・抽選に当たりやすいように回数を増やしてほしい。
- ・レストランも開いていると嬉しい。

展示や会場の環境に関する意見

- ・授乳室が綺麗で使いやすかった。

本ツアーも毎回高い満足度であった。感想には「気を遣うことなく過ごすことができた」というコメントが多く、参加者が乳幼児と保護者だけに限られていることが参加のしやすさ・過ごしやすさに繋がったようである。「気分転換になった」といったコメントからは、美術館が子供と一緒に外出できる場所の一つになり得ることがうかがえる。また、「他の参加者と交流できた」という感想もあり、子供を通じて交流するなど、鑑賞以外の場面でもコミュニケーションの機会が生まれていたことが分かった。一方で、本ツアーは抽選倍率の高さが課題となった。乳幼児と参加できるプログラムへの期待は高いが、1組ずつ行う本ツアーは定員に限界があり、期待に対して十分に応えることができなかった。

3-3. ベビーデー 赤ちゃんと暮らす家族のための 特別開館日

ツアーでの要望の高さを受け、2022（令和4）年度より実施規模を拡大し「ベビーデー」を休館日に実施することとなった。入場時間指定制を取り入れることで、定員をツアー時の10組から60組に増やし、出来る限り多くの対象者を受け入れたいと考えた。参加者は基本的に自由観覧とするが、希望者を対象に、アート・コミュニケータによる30分程度のミニ鑑賞ツアーも実施した。ベビーデーに関わるアート・コミュニケータは、ツアーを行うほかに、個別に鑑賞する人にもサポートが行きわたるよう、館内を巡回しな

がら参加者の様子を見守った。また、時間限定でミュージアムショップを営業し、カフェは休憩スペースとして開放することで離乳食などの持ち込みにも対応した。

◆開催概要

対象：ベビーカーに乗る年齢・月齢の赤ちゃんとその保護者

定員：60組（保護者は2名まで）

時間：10：00～15：00（入場時間指定制²⁰）

参加費：無料（※別途、要観覧料）

申し込み方法：当館ウェブサイトのフォームから

◆開催記録

表3 「ベビーデー」開催記録

	実施日	展覧会	来場数	ツアー参加数
2022年度	2022年8月22日（月）	蜷川美花 瞬く光の庭	52組136人	19組
2023年度	2023年8月21日（月）	フィンランド・ガラスアート 輝きと彩りのモダンデザイン	60組160人	20組

各回の参加人数は表3、当日の様子は図7、8の通り。

◆参加者の感想・意見

- ・子供連れもOKと言ってもらうことで心理的な負荷が減って来館しやすい。
- ・ベビーカーで回ることが出来てよかった。
- ・スタッフの見守りがあったので安心して楽しむことができた。
- ・子供が泣いたときにあやしてくれる人がいて安心した。
- ・食事や機嫌など子供の状態によって時間通りに外出できないこともあるため、入場時間に幅があり助かった。

- ・ウェルカムルームで子供が休憩することができて良かった。可能であれば子供がハイハイできるスペースも欲しい。
- ・土日や祝日にも開催してほしい。
- ・カフェ（休憩スペース）では飲み物などを注文できるようにしてほしい。

ベビーデーにはたくさんの親子が来場し、館内の至る所から子供の声が聞こえ和やかな雰囲気であった。ツアーの選択肢も残しつつ、自由に観覧できる日としたことで、多くの対象者を受け入れることができた。



図7 自由に観覧する参加者（2023年8月21日、撮影：井手大）



図8 会場内で乳幼児をあやすアート・コミュニケータ（2023年8月21日、撮影：井手大）

3-4. 休館日のツアーおよびベビーデーの経験から

障害のある人や、乳幼児と家族を対象とした鑑賞ツアー、そして新たに実施することとなったベビーデーにおいて、参加者の満足度は高かった。休館日に実施したことで、参加者はゆったりとした展示室で不特定多数の来場者に気を遣わず鑑賞することができたと考えられる。アート・コミュニケータが個人に寄り添った対応を行ったことも、豊かな鑑賞に繋がったのではないだろうか。また対象を限定したことで自身と近い状況の人が共存する空間が生まれ、安心感を覚えやすくなった。特に乳幼児と家族向けのプログラムにその傾向が表れていた。

プログラムの実施後は、参加者とペアになって活動するアート・コミュニケータから毎回フィードバックを収集した。個別のツアーの様子を細かく把握し、参加者のアンケートも参照しながら次の運営に役立てることができた。

4. 「フラットデー」への展開

休館日のプログラムには多くのメリットや成果があった。一方で当館は「あらゆる鑑賞者に開かれた美術館の実現」を運営方針に掲げ、どのような人も気兼ねなく来館できる美術館を目指している。それは、障害の有無や乳幼児連れに関わらず、いろいろな人々が美術館の中で共存している状態である。対象を限定した休館日のプログラムを続けるだけでは、その理念を達成することは難しい。そこで、理念に即した新たな形のプログラムを検討するために、クリエイティブ・ウェルビーイング・トーキョー事業を率いるアーツカウンシル東京の担当者も交えて協議を行った。本章では、この協議を経て2023（令和5）年度に開始した「フラットデー 障害のある方も、赤ちゃん連れの方もだれもが気兼ねなく来館できるプログラム」の計画と開催記録についてまとめる。

4-1. プログラムの条件・実施方法の検討

まず、障害のある人や乳幼児連れの人も過ごしやすく、且ついろいろな人が交ざり合いながら鑑賞できる環境をつくるための条件を検討した。その一つがプログラムの実施日を通常の開館日に移行させることである。2022（令和4）年度の障害のある人を対象としたツアーで、参加者に

行ったアンケートでは通常開館日での実施を見据えた質問項目を加えて参考意見を集めた。

◆参加者の意見・要望

質問：通常の開館日にどのようなサポートやプログラムがあると利用しやすいですか？

- ・特別な配慮は不要だが、必要な時に声を掛けやすいスタッフがいると助かる。
- ・気軽に会話できる雰囲気があるとよい。
- ・障害のない人も参加できるガイド付きのプログラムを実施してほしい。
- ・視覚に障害があるため作品に近づいて鑑賞したい。
- ・車椅子が大きく混み合う展覧会は行きづらいため、空いている時間帯を作してほしい。
- ・混雑状況の案内があるとよい。
- ・アート・コミュニケータのサポートがあるとよい。
- ・一緒に展覧会をまわる事前予約制のサポートがあるとよい。
- ・ろう通訳による解説があるとよい。
- ・展示室で伴走者の説明を聞いていたところ、「うるさい」と言われたことがあるため、休館日の実施がありがたい。

参加者の意見には休館日の実施を望む声もあったが、通常の開館日でも環境を整えることで行きやすいと感じる人も多くいることが分かった。休館日のプログラムは参加者から好評ではあったが、「だれもが気兼ねなく来館できる美術館」を目指し、通常の開館日に新しいアクセスプログラムの形を取り入れることを決断した。具体的には展覧会ごとに、あらゆる人が開館日でもゆとりのある環境で鑑賞できる日を設定することとした。

本事業はその日を「フラットデー」という名称にすることとした。フラットデーの名称には対等な関係を表現する和製英語「フラット」と気軽さを表す「ふらっと」の二つの意味を重ねている。これまで対象としていた障害のある人や乳幼児とその家族も含め、あらゆる人々が気軽に来館し、展示室で対等に共存できるようにしたいと考えた。そして、フラットデーの実施を通して「誰もが気兼ねなく来館できる美術館」を目指す当館の理念を発信しようとした。美術館はあらゆる人に開かれた公共空間であり、街中と同じように異なるニーズの人が一緒にいる場である。職員・スタッフや来館するすべての人がそのことを心に留め、多様な人

が心地よく過ごせる状況を作ることを目指している。

フラットデーの開催日は来場者が比較的少ない水曜日とし、事前予約制²¹で通常よりも来場数を制限することにより、ゆつりのある鑑賞環境づくりに試みた。またベビーデーと同様に、希望者のみを対象にアート・コミュニケータによる鑑賞ツアーも開催した。来館者の中には一人で心置きなく楽しみたい人もいれば、誰かと一緒に展覧会を楽しみたい人もいる。自由観覧の中に鑑賞ツアーという選択肢が用意されていることで、美術館での過ごし方の幅が広がり、より豊かな時間を過ごすことができると考えた。また、鑑賞ツアーで個別の状況に寄り添うアート・コミュニケータの存在は、美術館の運営全体を担う職員・スタッフとは異なる形でアクセシビリティを高めることに寄与している。

運営面では、来館するすべての人に入場制限の情報を周知しなければならないという課題や、事業のコンセプトを丁寧に説明する必要がある。そのため、チラシやウェブサイトのバナーなどには黄色を全面的に使用し、視認性が高く発信力のあるビジュアルとなるよう工夫した（図9、10）。加えて、コンセプトビデオを作成して当館ウェブサイトやSNSに掲載した²²。また、フラットデーへと展開したことで、休館日にアクセスプログラムを実施していたことにより発生していた監視スタッフの勤務日の負担やそれに伴う経

費も考慮することができ、持続可能なやり方にも繋がった。

4-2. 開催の概要と記録

フラットデーでは「ゆつり鑑賞日」と「ベビーアワー」の2種類の日を展覧会ごとに設けることとした。ゆつり鑑賞日は混雑した場所が苦手な人や、車椅子に乗る人や介助が必要な人も過ごしやすい日である。またベビーアワーではベビーカーを利用できるようにし、乳幼児連れの人も来館しやすい日とした。障害のある人の中には子供の泣き声など、大きな音が苦手な人もいる。すべての人に開きつつもターゲットを緩やかに分けている。

いずれも人数制限をすることでゆつりのある環境をつくるという条件は同じであり、完全予約制としている。通常の開館日に無料または割引対象となる障害者手帳を持つ人や小学生以下の子供などは、フラットデーにおいても予約せずに来館できるようにした。しかし普段は当日券の販売も行う当館が、特定の日のみを完全予約制とするには当初より混乱が生じる懸念があったため、ウェブサイトやチラシのほか、SNSでも告知を行うなどフラットデーの周知に力を入れた。それぞれの開催時間、来場人数、ツアーの参加人数は次の表4の通りである。

表4 「フラットデー」開催記録

	実施日		開催時間	展覧会	来場数 ^(※)	ツアー定員	ツアー参加人数
2023年度	2023年5月24日(水)	ベビーアワー	10:00～14:00	建物公開2023 邸宅の記憶	215人	各回5組	①4組9人 ②4組8人 ③4組11人
	2023年5月31日(水)	ゆつり鑑賞日	10:00～18:00		436人	各回4組	①5組9人 ②5組7人 ③4組7人
	2023年8月9日(水)	ゆつり鑑賞日	10:00～18:00	フィンランド・ガラスアート 輝きと彩りのモダンデザイン	314人	各回4組	①5組9人 ②4組5人 ③6組10人
	2023年11月8日(水)	ゆつり鑑賞日	10:00～18:00	装飾の庭 朝香宮邸の アール・デコと庭園芸術	334人	各回4組	①5組8人 ②5組8人 ③4組6人
	2023年11月22日(水)	ベビーアワー	10:00～14:00		180人	各回5組	①4組13人 ②5組11人 ③5組15人
	2024年3月13日(水)	ゆつり鑑賞日	10:00～18:00	開館40周年記念 旧朝香 宮邸を読み解く A to Z	325人	各回4組	①5組7人 ②5組10人 ③4組7人
	2024年3月27日(水)	ベビーアワー	10:00～14:00		239人	各回5組	①4組11人 ②5組15人 ③3組8人
2024年度	2024年7月10日(水)	ゆつり鑑賞日	10:00～18:00	生誕140年 YUMEJI展 大正浪漫と新しい世界	383人	各回5組	①5組9人 ②5組9人 ③5組7人
	2024年7月24日(水)	ベビーアワー	10:00～15:00		389人		①5組11人 ②4組9人 ③5組12人
	2024年10月9日(水)	ゆつり鑑賞日	10:00～18:00	建物公開2024 あかり、とるとき	384人		①5組10人 ②5組8人 ③6組11人
	2024年10月23日(水)	ベビーアワー	10:00～15:00		436人		①4組9人 ②5組12人 ③3組8人
	2025年1月22日(水)	ゆつり鑑賞日	10:00～18:00	そこに光が降りてくる 青木野枝／三嶋りつ恵	469人		①5組9人 ②6組9人 ③6組14人
	2025年1月29日(水)	ベビーアワー	10:00～15:00		497人		①4組10人 ②4組12人 ③4組9人

※ベビーアワーは開催時間中の来場数を集計

ベビーアワーでは夕方に乳幼児を連れた人の来場は少ないと見込み、1年目は14：00までの開催とした。14：00から18：00の閉館時間までは人数制限をせず、通常通りの運営となる。しかし14：00以降もベビーカーのまましばらく会場に残る人が多かったため2年目より開催時間を15：00までに延長した。各開催日の会場の様子は図11、12の通りである。

◆アート・コミュニケータによる鑑賞ツアー

それぞれの開催日にはアート・コミュニケータの鑑賞ツアーを実施した。ゆったり鑑賞日には「ゆったりツアー」、ベビーアワーには「ベビーといっしょにミュージアムツアー」という名称で行った。休館日に行ってきた方法と同じように1組に1名のアート・コミュニケータがつく。(図13、14)

ゆったりツアー

時間：①11：00～ ②13：00～

③14：30～の3回 各回最長90分

対象：どなたでも

定員：各回5組（1組の定員は原則2名まで）

申し込み方法：当館ウェブサイトのフォームから

※2024（令和6）年度より3回目のツアーは15：00開始に変更した。

「ゆったりツアー」は「障害のある方対象 アート・コミュニケータとめぐる庭園美術館」の実施方法を踏襲している。フラットデーでの開催となったことで、障害のない人も参加できるようにした。

本ツアーには障害のない人からも多くの応募があり、会話をしながら鑑賞を楽しみたいという要望が多くあることが



図9 2023（令和5）年度「フラットデー」チラシ

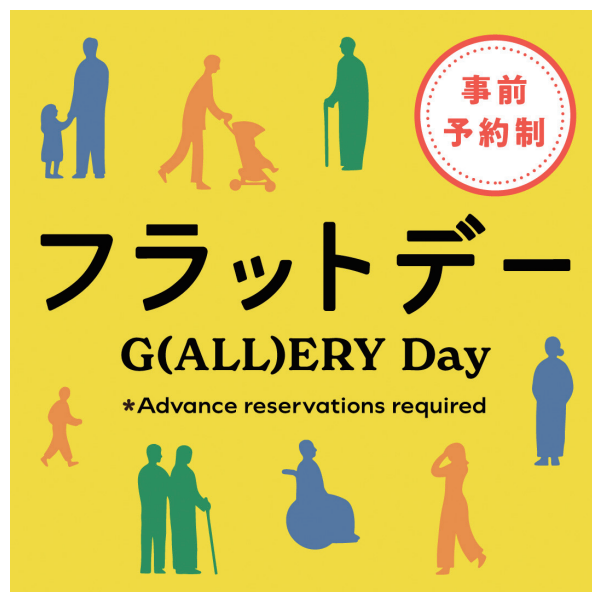


図10 「フラットデー」SNS用バナー



図11 ゆったり鑑賞日の会場内の様子（2023年11月8日）



図12 ベビーアワーの会場内の様子（2023年5月24日）



図13 ゆったりツアーの様子(2023年5月31日、撮影：井手大)



図14 ベビーといっしょにミュージアムツアーの様子(2024年3月27日、撮影：井手大)

分かった。休館日の鑑賞ツアーに何度か参加したことのある人からは「障害のある人に限定された特別な日ではなく、普通の日にいろんな人と一緒にいる中でツアーに参加できるのはありがたい」というコメントもアート・コミュニケータを通じて聞くことができた。

ベビーといっしょにミュージアムツアー

時間：①10：30～ ②11：30～

③12：30～の3回 各回最長60分

対象：赤ちゃんとそのご家族

定員：各回4組(1組の定員は原則2名まで)

申し込み方法：当日受付・先着順

※2024(令和6)年度は定員を各回5組とし、ウェブサイトからの事前申し込み制に変更した。

実施内容は休館日に行ってきたツアーと同様である。当日は、ツアー中の乳幼児に対して一般の来場者から「かわいいですね」と声を掛けられる場面があるなど、休館日の実施時には見られなかった光景も生まれた。ツアーの応募倍率は引き続き高いものの、落選した場合でもベビーアワーに来館できる仕組みとなったことで、多くの対象者を受け入れることに繋がった。

4-3. 運営の成果と課題

フラットデーの開催日には来館者全員を対象にアンケートを行った。フラットデーを知らずに来館した人は平均して約6割、多い時で7割以上にのぼっていた。多くの人が来館して初めて事業の趣旨を知るという状況であった。当

日の来館者からの意見は下記の通りである。

◆来館者の意見・感想

(1) ゆったり鑑賞日

フラットデーについて

- ・人数が少ないためゆっくり見ることができて良かった。
- ・段差が解消されていたため快適に展示を見ることができた。
- ・ゆったり鑑賞日とベビーアワーの違いが分かりにくい。
- ・いろいろな人がフラットに鑑賞できる場を作る取り組みに共感する。
- ・今日がフラットデーで完全予約制であることがわかりづかった。周知の仕方を工夫してほしい。

展示や会場の環境に関する意見

- ・年齢を重ねると足腰が弱まるため、椅子がたくさんあると助かる。
- ・解説などの文字のサイズが小さい。

ゆったりツアーに関する意見

- ・普段は一人で美術館に行くため、話をしながらまわるのは新鮮で楽しかった。
- ・ゆったりと展覧会の見どころを堪能できた。

(2) ベビーアワー

フラットデーについて

- ・スタッフからの声掛けやサポートがありがたかった。
- ・まわりも子連れの人が多く安心して過ごすことができた。
- ・ベビーカーや赤ちゃん連れの人が多く来館しているのは良かったが、普段より少し賑やかになるため、そういった環境が気になる人には別の日を勧めたい。

- ・子供がたくさん来館するプログラムは日を分けて実施した方がよいのではないかと。

会場の環境に関する意見

- ・赤ちゃんが離乳食を食べられるスペースがあると嬉しい。

ベビーといっしょにミュージアムツアーに関する意見

- ・子供も楽しそうに作品を見ていた。
- ・おしゃべり自体が楽しく息抜きになった
- ・子供のペースに合わせてもらい、最後まで見ることで嬉しかった。

全体的にフラットデーの趣旨に賛同するコメントは多かった。一方で、完全予約制が分かりづらいといった回答や、ベビーアワーでは「赤ちゃんの声が気になる」といった意見もあり、プログラムの開催についての周知が行き届いていないことが課題となっている。特にフラットデーを開始した当初は、事前予約をせず当日券を求めて来館する人が後を絶たず、警備スタッフや当館の職員が、正門で来館者に対しての説明や対応にあたった。2年間の実施を経て少しずつ認知されてきたが、来館前に当館のウェブサイトやSNSを見ない人もいるため、すべての人への周知は難しい。情報が届かなかった人の入館を断ることは「だれもが」気兼ねなく来館できる美術館の趣旨に反するというジレンマもある。

おわりに

本稿では、歴史的建造物を活用する当館の特性を考慮して始まった休館日の鑑賞ツアーの実施を経て、「あらゆる人々が展示室に共存する」ことを理想に掲げ、フラットデーへと転換した5年間のアクセスプログラムの取り組みを振り返った。

アクセスプログラムをきっかけに来館し、気兼ねなく鑑賞する時間を過ごせた参加者が多くいたことは本事業の大きな成果である。加えて、筆者を含む美術館の担当者は、プログラムを通して来館者と直に接する監視・警備スタッフやアート・コミュニケータなどから、様々な来館者の状況を把握できるようになった。例えば車椅子に乗る人の視線からは見づらい作品があるなど、展示室での来館者の困りごとを具体的に知ることで、通常開館日における情報保障や対応を検討することにも繋がっている。

しかし、すべての人々を対象とするフラットデーには、そ

の趣旨や事前予約制であることの情報が行き届かないという運営面の課題もある。周知の工夫を検討しながら実施を重ね認知度を高めることで、フラットデーの理念を多くの人々と共有していきたい。「あらゆる鑑賞者に開かれた美術館」のあり方を、ともに考える機会を増やしていきたいと考えている。

ベビーアワー開催日に来館した人の感想に「毎日がフラットデーになるといい」という言葉があった。それこそ当館が目指す姿である。「だれもが気兼ねなく来館できる美術館」とは、アクセスプログラムが無くてもあらゆる人がいつでも来館し、当たり前で共存できる美術館である。これまで実施してきた鑑賞ツアーやフラットデーとは、その理想に近づくための道のりであった。アクセシビリティの取り組みは、異なる視点や専門性を持った人々との対話の中で歩みを進めることが大切である。今後も美術館の職員やスタッフ、アート・コミュニケータ、そして来館者も含め、多くの協力者とともに地道に事業を進めていきたい。

【註】

- 1 ICOM 日本委員会による以下のサイトを参考にした。
ICOM 日本委員会．“新しい博物館定義、日本語訳が決定しました”．ICOM 日本委員会ウェブサイト．<https://icomjapan.org/journal/2023/01/16/p-3188/>（2025.1.20 最終閲覧）
- 2 東京都庭園美術館．“使命と基本方針”．東京都庭園美術館ウェブサイト．https://www.teien-art-museum.ne.jp/museum/basic_policy/（2025.1.20 最終閲覧）
- 3 アーツカウンシル東京．“プロジェクトについて”．「クリエイティブ・ウェルビーイング・トーキョー」ウェブサイト．<https://creativewell.rekibun.or.jp/about/>（2025.1.20 最終閲覧）
- 4 岡部友子「旧朝香宮邸活用 30 年『美術館』としての取り組み」『開館 30 周年&リニューアルオープン記念 東京都庭園美術館 30 + 1』（東京都庭園美術館，2014），70 - 76 ページ．
- 5 同上
- 6 エレベーター棟を本館の外側に置き、建物と接続することで実現した。
- 7 東京都庭園美術館．“バリアフリーについて”．東京都庭園美術館ウェブサイト．<https://www.teien-art-museum.ne.jp/visit/accessibility/>（2025.1.20 最終閲覧）
- 8 公益財団法人東京都歴史文化財団「東京都庭園美術館 令和 3 ～ 8 年度 指定管理者 提案書類（事業計画書）」45 ページ．東京都生活文化スポーツ局ウェブサイト https://www.seikatubunka.metro.tokyo.lg.jp/bunka/bunka_shisetsu/files/0000001437/teibihontai.pdf（2025.1.20 最終閲覧）
- 9 同上 26 ページ．
- 10 同上 60 ページ．
- 11 執筆時現在約 192 名が登録している。（アート・コミュニケータ東京，<https://art-c-tokyo.net/>）（2025.1.20 最終閲覧）
- 12 稲庭彩和子，伊藤達矢「序 教育普及からアート・コミュニケー

ションへ』『美術館と大学と市民がつくるソーシャルデザインプロジェクト』（青幻舎, 2018）, 12 – 14 ページ.

- 13 とびらプロジェクト “とびらプロジェクトってなに?”. 「とびらプロジェクト」ウェブサイト. <https://tobira-project.info/about/#concept> (2025.1.20 最終閲覧)
- 14 『とびらプロジェクト 活動紹介リーフレット 2024』（東京都美術館, 2024）10 ページ.
- 15 障害のある人が安心して鑑賞できるよう、特別展の休室日に開催されている鑑賞会。とびラーと任期満了したアート・コミュニケーターが参加者の受付や移動のサポートなどを行う。
- 16 前掲『序 教育普及からアート・コミュニケーションへ』『美術館と大学と市民がつくるソーシャルデザインプロジェクト』49 – 51, 74 – 76 ページ.
- 17 前掲『とびらプロジェクト 活動紹介リーフレット 2024』（東京都美術館, 2024）11 ページ.
- 18 開始当初、プログラムの名称は「障害のある方向け アート・コミュニケーターとめぐる特別鑑賞ツアー」であったが2年目の2021（令和3）年度より本名称となった。
- 19 障害のある方を対象とするツアーは「アート・コミュニケーター東京」に登録するメンバーが担当し、乳幼児と家族を対象とするツアーは、「アート・コミュニケーター東京」のメンバーでもあり「ベビーといっしょにミュージアム」という名称で活動する団体が担うこととなった。
- 20 入場時間は約1時間ごとに4つの時間帯に区切った。（① 10時～10時50分、② 11時～11時50分、③ 12時～12時50分、④ 13時～13時50分）
- 21 入場制限は新型コロナウイルス感染症の拡大に伴って導入されたチケットの事前予約システムを活用し、システム上で販売枚数を絞った。
- 22 「フラットデー ショートムービー」YouTube 東京都庭園美術館 公式チャンネル. <https://www.youtube.com/watch?v=oVbfNcZwXJo> (2025.1.20 最終閲覧)
「フラットデー ロングムービー」YouTube 東京都庭園美術館 公式チャンネル. <https://www.youtube.com/watch?v=Q6P6UkWzGZc> (2025.1.20 最終閲覧)

編集後記

東京都庭園美術館紀要2024は、当館の2名の学芸員による論考を掲載します。

まず、建物保存・修復担当である高橋さおりによる一つ目の論考は、旧朝香宮邸2階書斎に竣工時から現存する絨毯の保存処置についてまとめたレポートです。重要文化財である建築とともに、関連する家具調度を後世に伝えていくためには、どのような調査や作業が必要かを提起しています。

次に、教育普及を担当する大谷郁による二つ目の論考は、2020年度から当館が取り組んできたアクセスプログラムについて紹介しています。特に、「あらゆる人々が展示室に共存する」をテーマに掲げ、2023年度から開始した「フラットデー」について、その経緯やアート・コミュニケータと連携して活動してきた様子を詳細に記しています。

それぞれの調査研究が、当館の今後のさらなる発展に寄与することを期待します。最後になりましたが、本紀要制作にあたり、多くの方々のご尽力を賜りました。ここに納められた原稿執筆にあたりご尽力賜りましたすべての関係者の皆様に、心より御礼申し上げます。

（東京都庭園美術館 岡本純子）

東京都庭園美術館 紀要 2024

発行日：2025年3月31日

編集：東京都庭園美術館

制作：株式会社石井印刷

発行：公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都庭園美術館

〒108-0071 東京都港区白金台5-21-9

Tel: 03-3443-0201

The Bulletin 2024 Tokyo Metropolitan Teien Art Museum

March 31, 2025 Edited by Tokyo Metropolitan Teien Art Museum

Produced by Ishii - Printing Service

Published by Tokyo Metropolitan Foundation for History and Culture

Tokyo Metropolitan Teien Art Museum © 2024

5-21-9 Shirokanedai, Minato-ku, Tokyo 108-0071 Japan

Phone 03-3443-0201

Printed in Japan